

第二章 グアタパラ耕地の歴史と由来

最初のグアタパラ土地所有者と成ったマルチーニョ・ブラード・ジュニオールは、ポルトガル国ブラード地方よりアントニオ・ダ・シルバ・ブラードの祖先でマルチーニョ・ブラード・ベリジアナ夫妻の長男として、1843年モジ・ミリン郡カンポ・アルト農場に於いて出生、マルチーニョ・ブラード・ジュニオールと命名され、通称「マルチニコ」といわれる。1848年父親がサン・パウロ市に住居を求め、市内で2人の弟達出生、3人兄弟と成る。

マルチーニョ・ジュニオールは貴族にはならず、家族の収益で充分中産階級を保つことが出来た。特に耐久力については馬以上と云われる、ロバの商業的取引を営んだ、又ほかに商業も手がける。



グアタパラ耕主マルチーニョ・ブラード・ジュニオール（マルチニコ）の彫刻銅版

1860年(12歳)で政治に興味を持ち、17歳でサン・パウロ大学法学部に入学、意義申立人の傾向に変わって行く。大人に成ってからも斬新的な思想を持ち続ける。共和制に改革されたものの、まだまだ伝統的な君主制の名残が続く中で、たえず政治革命を求め共和黨員に入党。

1870年代には僅かながらコーヒーがサン・パウロ州にも出始め、ガブリエル・ジュンケイラ大尉、ルイス・エルクラノ・デ・ソウザ・ジュンケイラ少尉兄弟はモジアナ地方の農場にコーヒーを植え付け始める。ジュンケイラー族とコーヒー植付け問題、農地分配(ブラドポリス~グアタパラにかけて隣接)による地元での争いが生じる。

地方の変化には、新しい思想の農場主の到来、サン・パウロ県立法議会への参加、条例を新聞に掲載、政府への参加、鉄道会社の進出、コーヒー輸出店等、具体的な自分の農場の改革に於いて、比較的簡単に近代化が図れた。

1870年後半に新思想者達、ルイス・ペレイラ・バヘットとその兄弟、少し後にはエンヒケ・サントス・ズモン達と新思想を議論するものであった。

当時のサン・パウロ州は県で治められており、1878年～1879年に県会議員を務めながらノーバ・オエステの代表も1882年～1883年迄務める。

黒人奴隷解放を手伝い、労働無報酬を不逞し続け、1886年には海外移民を促進させ、1887年には単独でヨーロッパへ出向き、海外移民出国を取り付ける。又法律的にも国の近代化を促進させる。

1877年頃、幾多の地方視察を繰り返し、既に1870年以前に僅か、コーヒー植付け試作が始められており、又農場周辺の土地をさらに買い求めだす。

マルチーニョ・ジュニオールは農業生産地の土地代の高騰、農業地帯への労働者の人口増加、当時の農業生産物は単に、家族、使用人、奴隷等への自給生産だけであった。他の町から新しい人達の到来によって、農地に対する評価も著しく上がる。それ以前、土地は出来るだけ自然の状態、未開発、原始的、野性的、且つ自然状態で粗野に生き、必要なだけ蒔き付け、地域は奴隷等で貧しく、焼畑であり手間がかからず、新しく芽がふくと牛を放したり豚も飼った。コーヒーの到来により過酷の労働できつくなり、野に逃げだすが、農地は少数の限られた農主だけのものであったので、逃避するがすぐに捕らわれたあと、奴隷にはシバタダ(鞭打ちの刑) 梶杓があり耕地奥の洞窟に拘束されるのであった。

1877年マルチーニョ・ジュニオールがリベイロン・プレート方面を視察した折に、粗末では有るが、巧みな精選(脱穀)機を幾つもサン・シモンで見かけるものであった。

グアタパラ農場は1885年に購入されその支払われた代金は60コント・デ・レイス(当時のルートで換算すると3千6百円、日本農家の日雇いが飯付きで1日20銭)であった。20年後には90倍にもなる。

農場名「グアタパラ」の由来は農場内を流れていた小川がグアタパラと云っており、鹿に属する動物がたくさん生息しており、その動物名がグアタパラであったのが小川につき、さらに農場名に付けられたものと思える。購入した年の初年度(1885年)に280アルケール(1アルケールは約2,42HA)を開墾して2,500本のコーヒーを植え付ける。

奴隷解放後のブラジルに於ける労働力の移動(サン・パウロ州政府の移民政策)により、パウリセイア(サン・パウロ市の別名)に州内の有力な農場主や政治家によって結成された「移民促進協会」、この協会の初代会長にマルチーニョ・ジュニオールが就任した。移民者の行き先を安定させ、且つ農地に移民がスムーズに入れるよう道をひらいた。単身でヨーロッパ(1887年)に出向いた折、イタリア北部にまで足を伸ばして、サン・パウロ州への移民誘致プランを多くのイタリア新聞紙上に告示宣伝した。又ジェノヴァに移民募集事務所を開設、協会はまた海上輸送に関してイタリアのアンジェロ・フィオリタ社と独占契約を結びジェノヴァ～サントス間の輸送を任せた。外国の人達に移民を希望するものなら、その家族の旅費を無料にした。

当初は緊急を要したので、見せかけではあるが自由労働者か契約労働者、又1888年5月13日の奴隷解放令までは、バイアから奴隷を連れてきて使うが、解放後労働力がくるうが、もともと奴隷解放論者でもあった。彼が悩んだ問題は労働力の問題ではなく、コロノ(労働者)も解放されないかとの不安の紛争のほうであった。

19世紀当時、農場とは財産の結合であり、富裕の蓄積、生産性の高い仕事とっていた。1888年までは労働(仕事)と云えば奴隷がするものであり、さらに農場が資産と受け止められ、現在の農地所有権に変わるには時間がかかるものだった。

移民者達はコーヒーの植付けと収穫に従事する。

マルチーニョ・ジュニオールは6千アルケーレスのグアタパラ農場を創設するにあたり、ジョアン・フランシスコ・モライス・オタビオ氏より購入(ズモンのエンヒケ・サントス・ズモン説もあり後日2003年8月29日に、元ズモン市長エドワルド・ロレンザット氏に問いたすが、完全に別人であった。)

そこに2百万本のコーヒーを植え付けた。1906年には2百17万本(2,170,000)のコーヒーからの収穫量は3百万キロ。1911年頃2百20万キロ「蒼氓の92年」(内山勝男著)の中にグアタパラ耕地配耕者88人の内脱耕者26名(6ヶ月後)記録に若干違いがある。ズモン耕地配耕者210人の内、56日目に全員脱耕するとの記載あるがグアタパラ耕地の残留者が多いのはコーヒー樹齢が若かったと云える。

希望と新たな生活を期待できる事を望み、海外からの移民も動き出す。家族構成で人手の多い程受入れられ(2つのエンシャダ)即ち2人の労働力で1農年5千~1万5千本を収穫するものであった。

農場は幾つかに区切られており、2,688ヘクタールがコーヒー園、480ヘクタールが穀物、48ヘクタールが砂糖キビ、これらからみてもコーヒーの占める量がきわめて多く、外国に輸出するものであった。他の収穫物(生産物)は農場内で消費、残った物は売るものであり、場内は良く統制されており、小さい町と同様、イタリア、アロナ地方出身の「ジウゼペ・セルトリ」支配人が直接支配し、その報告などを受け判断して指示するものであった。

原始林を開墾してその材木で新しく移民して来た人達の住居を作り、又住居を作る為に煉瓦、瓦が必要に成り、モジ・グアス川付近に煉瓦、瓦工場を作る。この広大な農場を維持する為には、また、たくさんの人達が必要であり、頑丈な建物が必要だった。

農地は大きく区画して「マルコ・ペドラ、プレジジョン・グランデ、モンテイロ、グアタパラ」の4ヶ所に成っていた。多くの労働者、使用人達が住む為、5百軒位の住居が建っており、又建物の中にはコーヒーに必要な機械置き場、修理場、倉庫、薬局、診療所、初等学校、馬小屋、肉屋、飲料雑貨店、パン屋、クラブ、レストラン、ビヤホール、教会、ビール製造部、炭酸飲料水、牛の鞣し革での加工等、これらの施設が大切に使用され、清潔が保たれていた。

大勢の人達が住居しており、その人達が自由に使用できるように取りはかられていた。医師、歯医者、初等学校の先生、仕立て屋、床屋などが場内に住み、移民者に応じるものだった。農場中央を町にする計画があり、道路を交差させたり、前述の必要施設を設置、その町に妻の名前「アルベルチーナ。」と考えていたが、リベ

ロン・プレート市の著しい発展で実現しなかった。

移ってから少したつと亡くなる人も出始めて、お墓も必要になり場内に作る。さらに電話、郵便事業、イタリア人むけ学校が必要となり設置される。移民者2,074人の内、イタリア国籍1,662人、ブラジル人110人、302人が他の国籍であった。総数で343家族であり、会話はイタリア語の方が一般的であった。

1887年にコーヒー精選（脱粒）場の建物にイギリス建築の特徴を取り入れて設けられる。コーヒー管理作業は拡大且つ近代的だった。コーヒー精選機は最新式で1日1万5千キロの精選が可能、そのまま消費市場に出せるものだった。150馬力のボイラーで4機の発電機を作動させ、その内の3機は皮剥ぎ、艶出し、精選と乾燥、残る1機は製材、旋盤、配合所に使用された。



コーヒー精選機（耕地最後の頃）

コーヒーの乾燥場は大で、68,000平方メートルの面積があり、煉瓦敷きの上にアスファルトが施され表面が滑らかで、コーヒー豆1粒たりとも失う事が無かった。ブレイジョン・グランデ地区も小規模ながらも同様に作られていた。

収穫されたコーヒー豆は水路（延10キロメートル）で運ばれ大きいごみなどが分けられ果肉も削げ、さらに果肉取り機に掛けられた後、天日乾燥場で乾かしたあと、最後の仕上げの焙煎をし袋詰め後、国内市場、又はモジアナとパウリスタ鉄道よってサントス港に積み出される。精選所まで線路が引かれておりトロッコで運ばれた。出来上がったコーヒー袋は、タイルが張られ傾斜の施されたトンネルを通りターミナルに着く。精選所の下側は鉄道のターミナルに成っており、パウリスタ鉄道の支線が引き込まれていた。1911年には耕地内に私設の鉄道支線延長24キロメートルが施され、3ヶ所の駅に通じており20両の大型荷車が有り150頭の口バで牽引するものであった。

（愛土ブラジル・佐藤常蔵著では軽鉄機関車2台と貨車18両で1960年頃まで使用すると記載あり）



グアタパラ耕地内の小学校



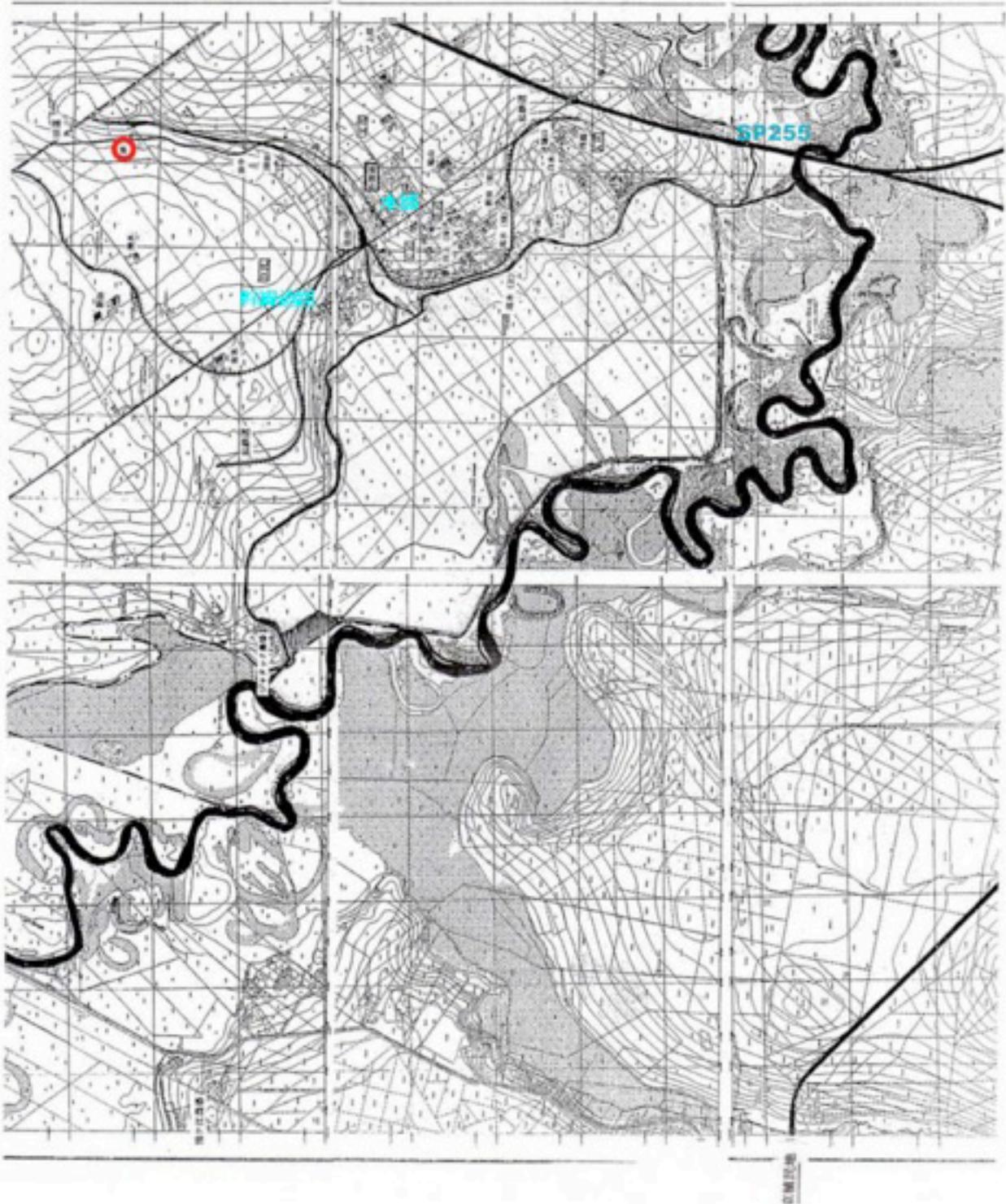
コーヒー精選所



監督級が使用したコロニア・アルチスタ 晩年の弘田千代太氏等も入居（写真は1996年頃）

耕地内に延長 24 k m の私鉄道線路。

現在のグアタバラ移住地の地図の上に当時の私鉄道線路記載。



*現在のグアタバラ移住地に重なる。赤印は私（林）の農地である。

農場の本部は 1875 年に建設され、移民者居住地（コロニア）の中央より少し離れ、最初の場所はビアド川（現、カポンダ・クルース耕主邸宅、またモジアナジャタイー支線斜め横、カポンダ・クルース駅の少し先の湖より伏流水で旧本部の少し川上から地上を流れる。）現在セルパービ製紙工場苗場の斜め前付近。

場内で砂糖も作っており、製糖工場は1906～1916年にイタリア人の技師の手で建築される。砂糖の必要から工場が建築され煙突は色彩豊かに施し、数拾トンの煉瓦を使用する。周辺には高い物がなく遙か遠方を望め、波状に植え付けられたコーヒー園が絶景であった。製糖工場は1921年まで稼動するが以後、ラランジャ（オレンジ）の選果場、輸出向けの荷作場に使用され以後、ラランジャ用途の建物と呼ばれるようになった。

邸宅から南側のグアタパラ川を渡った小高い所には小聖堂が望め、その建築は1886年～1930年までついでに作られるが、正確な建築時期は分からずじまいである。マリア・エリザ・ボルジェ女史の調査では、描かれている壁画からして1880年～1930年代と窺える。イタリアの建築家による建築物であることが窺える。

1935年には映画館が建てられ、幾つもの映画が放映されたし数々のショーも繰り出され披露された。

基礎設備（上下水、電気）は早くから施されており、地方の1耕地に於いてこれほどまでに設備が完備しているのも稀であり、大変快適であった。離れの1軒屋には井戸が掘られてあり、コロニアの中央の場合、下水管が設置されて、処理なしにグアタパラ川に流す。当初から支配人宅には水道が配管されており、時を経てから、コロニア中央にも水道が配管された。水源地より各家庭に供給され鉄道駅近くの、右側のモンテイ口区の配管には等高線技術を駆使して引き入れる。又電気の配給は1912年～1913年に施される。

色々の催し事(映画、祭等)はコロノの広い庭(球技場前には平らな広い庭があった)で開催された。一方殿方(耕主、支配人、“コロネオと称される特権階級の方々”等)の淫売屋、名付けて“フランス屋”は最初の農場本部が設置されてたビアド川付近に出来た。フランスから海を渡り、サントス港で下船、汽車でサン。パウロ市まで出て、さらにモジアナ鉄道線に乗り継ぎ、モジグアス川の上流から小船で下る。そしてグアタパラ駅の南側の古い鉄橋の少し上方に“ポルト”と云った船着き場で降りる。農場は广大で、大佐達の休息の場であった。



ポルトの一つ、ボトランチン製紙工場の西側川辺の船着き場（1960年中頃迄）

1910年～1912年まで移民者の支払いにはリラ、ポンド英貨で年間払い、中央本部で消費した経費を12ヶ月に分割して、コーヒー採取量の出来高内容で差し引き残高がある場合支払われた。殆ど農場独自の通貨で支払われる。1937年にはさらに農業労働移民者の為に、1つのコロニアとさらに7つの臨時使用人の建物が作られた。場内には約2000人近くの使用人がおり1日100～200人の日雇者が出入りしていた。コーヒーだけでなく、オレンジも英国向けに輸出、マンジョカ（タピオカ）を植え付け、コーヒー樹の衰退の兆しが現れ、その快復としての施肥用（堆肥用）に、又自家消費に牛、マンジョカを取り入れる。

此処に1927年度のグアタパラ耕地の資産とその内訳と生産高を示す。

資本金—5,000 コント、積立金—5,7000 コント、コーヒー樹数—176 万本、コーヒー生産予想—16 万アローバ（240 万 KG）、総面積 6.354 アルケーレス（15,376HA）牛畜—2,000 頭、マンジョカ製粉年間生産—25,000 袋、コーヒー樹 30,000 本に対する灌漑設備と発電所を有し、9,000M の供水管をノルウエーから求める。桑樹 1 万株。（愛土ブラジル・佐藤常蔵著引用）

（注）モンブカ湖もコーヒー樹灌漑の為に塞ぎ止め、築かれたものだが技術的に給水出来ず、ピアド川の水源利用プランもあったようだ。（モルガンテ農主頃支配人ルイス・ジレピ氏の説明ジレピ氏の父親）

1929年ニューヨークの株価が崩れ一夜にして、コーヒー経営農場はことごとく破綻するものであった。マルチーニョ・ジュニオール（マルチニコ）グアタパラ農場も経営困難となり1942年にはモルガンテ一族に農場を売り渡す。

グアタパラ地区（ジストリト Distrito）に成ったのが1938年11月30日州条例 No. 9775. アデマル・ペレイラ・デ・バーロ氏サン・パウロ州連邦異議申し立て人の手で成立し、1939年にグアタパラ農場地域が地区に昇格する。またこの時はマルチーニョ・ブラード一族の農場であった。

1942年モルガンテ一族が農場を購入する頃、モルガンテ・グループは製糖工場が各所にあり、ピラシカーバの“モンテ・アレグレ”、アララクワラの“タモイオ”、リオ・デ・ジャネイロにも工場が有り、パウリスタ製油株式会社の出資者でもあった。またモルガンテ・グループはサン・パウロ州一番の砂糖生産者でも有り、サン・パウロ州に於いて最初の製糖会社を創立する。

新しい農場所有者の目にはコロノ中央地帯は市街地に見え、まるで郡のような働きに受けとめるもので、所有地の一部を失う事が決定的とみなし問題化する前に、コロノ中央を別な場所、特に農場外からはずして移すものだった。州条例で地区に昇格、又農場経営内での諸問題、運営上で働いてる人達の住居もある事から、リベロン・プレート郡に119,800平方メートルの土地をリベロン・プレート第1登記所を通し、簡単明瞭で難しい趣旨を付けず寄贈するものであった。

寄贈後モルガンテ代表は区画整理させ、特に2つ建物を作らせ、その1つに民事登記所（出生、死亡、婚姻等）と別のもう1つには市役所の支部、双方に住居と職員を付けさす。残った土地には将来教会、初等学校、幼稚園、保健所、留置所（警察派出所）建設の為に煉瓦の寄贈までする。

新しい農場主モルガンテ・グループに成ってから楽団、ボーチャ場（丸く平たい直径10センチ位鉄製の円盤これを投げ合って競う、イタリア競技とか）が作られその中にバール（駄菓子店）まで置き、菓子、飲料水、ビール、アイスクリームまで売るものだった。サッカー場も観覧席まで設置されたものであり、ミニサッカー

コートも有るほどだった。

毎年11月11日はサン・マルチーニヨの日で保護権（守護神）を盛大に催され、コロニア全員が参加。毎年クリスマス前夜には使用人全員にポルトガル産のワイン1箱が各家庭に贈られる。

使用人の医療に関してはアララクワラの緊急病院へ運び、又救急車が常備待機していた。

1955年には電話が開通、電気が導入されたのが1956年、その導入にはリベイロン・プレート市役所が手がけ、他にも初等学校、幼稚園の設置建設も取り上げ実施される。

地区の方が急速に発展するが、農場の方は衰退する一方であり、それでもグループの長老が治めている内はなんとか維持出来たが、経営管理者が若返ると、さらに衰退する中、必要のない建物は崩し始める。又シルバ・ゴールド・グループに売り渡されると、益々酷く成り、大半の人達が地区の方へ引っ越してしまう。数有る歴史の刻まれた建物は殆ど壊されてしまう。

1962年リベイロン・プレート市条例 No. 246 に於いて、9月8日付けで農場内にあった地区本部をパウリスタ鉄道駅前に移転させる。

1964年に最初の市政独立を求めるが、市民投票では成立には到らずであった。

1975年にはモジアナ支線“モンテイロ線”の鉄道線路も取り除かれる。

1989年 郡独立の為の市民投票では、大半が親権解除を求め成立する。

1990年1月9日 親権解除され、グアタパラ郡誕生となる。

- 参考文献
- デニーゼ・ホザリオ女史のウニピ修士論文要約
 - エルネスト・ノリオ高橋技師資料提供引用
 - 「蒼氓の92年」内山勝男著引用
 - 「愛土ブラジル」佐藤常蔵著引用
 - 「ブラジル学を学ぶ人のため」布留川正博著引用